

『ヴァイマルの聖なる政治的精神ードイツナショナリズムとプロテスタンティズム』と盗用されたとの指摘のあった文献の対比表

〇〇〇：同一の表現を用いている部分
 〇〇〇：漢字とひらがなの違いがある部分
 〇〇〇：同様の内容で表現が異なる部分

番号	調査対象文献	頁&行	盗用されたとの指摘のあった元の文献	頁&行
	深井智朗『ヴァイマルの聖なる政治的精神ードイツナショナリズムとプロテスタンティズム』(岩波書店、2012年 p.197)		W.パネンベルク著 近藤勝彦・芳賀力訳『組織神学の根本問題』(日本基督教団出版局、1984年 p.277) ※	
①	レーフラーも、ニーチェのキリスト教批判がその矛先を向けているのは、カントの影響を受け、 <u>神を実践理性の要請として理解し、キリストの神性は宗教的な価値判断</u> であると考えたリッチェル学派、とりわけヴィルヘルム・ヘルマン的なキリスト教の再構築にあると見ている。そこでは既に述べた通り、 <u>人間の意志が行う価値評価がキリスト教信仰の生みの母</u> であると理解されているので、 <u>リッチェル学派はニーチェのキリスト教批判に対して完全に無防備であり、逆にこの神学に対してはニーチェのあらゆる価値の転倒というプログラムは完全な破壊力を持っていたというのである。つまり、この神学は、ニーチェの前提、すなわち宗教的言表は価値評価をする意志による決断であるという前提を基盤として成り立っている</u> のであり、ただリッチェル学派は <u>ニーチェとは逆の結論を出しただけ</u> なのである。それ故にレーフラーはヴィルヘルム期に神学者たちをニーチェと共にトータルに否定することができたのである。	P197 L4 ~ L13	この学派においてはーリッチェルよりもむしろヴィルヘルム・ヘルマンにおいて一層そうだったのだがー、 <u>神は実践理性の要請として理解され、キリストの神性は宗教的な価値判断として理解された</u> 。それによって <u>人間の意志が行う価値評価がキリスト教信仰の母胎</u> であることが解明されたのである。すでにトレルチは、宗教を幻想とみなすフォイエルバッハの診断に対して、このリッチェル学派の神学が <u>全くの無防備</u> であることを強調したわけであるが、さらに <u>この神学に対してニーチェのあらゆる価値の転倒というプログラムは、完全な破壊力を持っていたわけである。この神学はまさにそれ自体ニーチェの前提、すなわち宗教的言表は価値評価をする意志による判断であるという前提を基盤としてその上に立っている</u> 。この神学はただ <u>ニーチェとは逆に価値評価をしただけ</u> である。	P277 L2 ~ L9

番号	調査対象文献	頁&行	盗用されたとの指摘のあった元の文献	頁&行
	深井智朗『ヴァイマルの聖なる政治的精神ードイツナショナリズムとプロテスタンティズム』(岩波書店、2012年 p.197~p.198)		W.パネンベルク著 近藤勝彦・芳賀力訳『組織神学の根本問題』(日本基督教団出版局、1984年 p.278) ※	
②	<p>ところがレーフラーは、このリッチェル学派の傾向は、リッチェルとヘルマン、そしてさらにはマルティン・ケーラーを経由してカールバルトの神学の前提となっているというのである。<中略>実はこのような<u>超自然主義的な神学が可能になるのはバルトが神学において「信仰の決断」という一点を必死に確保しているからであり、そこにバルトの神学は土台を置いているからである。</u></p> <p><u>それ故にバルトの超自然的な思惟の中には、真理を意志に基礎付けたニーチェの考え方が既に前提とされている</u>にもかかわらず、</p>	P197 L14 ~ P198 L3	<p>外見上その真理性に関して非常に確かに見える<u>超自然主義的な神の言表は、それが可能なのは信仰の決断に基づいてであるということに土台を置いているからである。</u></p> <p><u>それゆえに、[バルトの]まさしく超自然主義的な思惟においてさえも、真理を意志に基礎付けたニーチェの考え方が、結局のところすでに前提されているのである。</u></p>	P278 L1 ~ L3
	むしろバルトの神学そのものがニーチェの神学批判の標的であり、それによってその誤りが明らかにされるものであると分かるとさえ言うのである。つまり、	P198 L10 ~ L11		
③	<p>リッチェルにおいてもバルトにおいても、<u>実践的な要求が超自然的な真理へと飛躍する動機を与えているという点では同じことなのだ</u>という。バルトはそれを「信仰の決断」と表現しただけなのである。<u>この線でニーチェを克服することはできないのであり、むしろバルトの神学そのものがニーチェの神学批判の標的であり、それによってその誤りが明らかにされるものであることが分かるとさえ言うのである。決断としての信仰がその内容の真理性にとって決定的になっているような神学では、ひとはニーチェの意志の形而上学の地平から自由になっていないのであり</u></p>	P198 L7 ~ L13	<p>ここで共通していることは、はっきりと説明されているにせよいないにせよ、<u>実践的な要求が、あるいはもっと現代的に言い表すと信仰の「決断」が、超自然的な真理へと飛躍していく動機を与えているということである。この線上においてニーチェを克服することはできない。なぜなら、決断としての信仰がその内容の真理性にとって決定的になっているところでは、人はまだニーチェの意志の形而上学の地盤から離れ去っていないからである。</u></p>	P278 L7 ~ L11